

# 「東部ユーラシア」は「東アジア」に 取って代わるのか

——近年の「東アジア世界論」批判を踏まえて——

黄 東 蘭

## はじめに

「東アジア世界論」は東洋史研究者西嶋定生が1960–1970年代に提唱した学説である。それによれば、中国皇帝と周辺諸勢力の首長との冊封関係に基づいて、漢字、儒教、佛教（漢訳仏典）、および律令制が周辺の朝鮮、日本、ベトナムに広がり、中国を中心とする「東アジア世界」、「東アジア文化圏」が形成された。東アジア世界論の最大の眼目は日本の歴史を東アジア史の一部としてとらえることにあり、したがって、東洋史・日本史研究者の間で大きな反響を呼んだ。今日、「東アジア史」という研究分野が確立され、夥しい数の成果が蓄積されている。「東アジア」という地域概念は、歴史研究の範囲にとどまらず、高校の学習指導要領にも盛り込まれ、歴史教科書を通じて社会一般に広まった<sup>1)</sup>。

一方、西嶋説に対して、当初から、それが中国と「東辺」との関係を意識したものであり、中国王朝と非漢字圏の北方・西方の遊牧政権との関係を説明できない、との批判があった。2000年前後からは、日本の歴史学界を代表する学会の全国大会などの場で「東アジア世界論」が批判され、「東アジア」という枠組みが議論の対象となった<sup>2)</sup>。これを背景に、「東アジア」に取って代わって、「東部ユーラシア」（「ユーラシア東部」、「東ユーラシア」などともいわれるが、以下、本稿では、そのなかでもっとも出現頻度の高い「東部ユーラシア」という語を用いる）を積極的に使用する研究者が増えており、2010年ごろから、「東部ユーラシア」を題名に含む論文や著書が数多く現れ、大学の附属研究機関の名称としても使われている<sup>3)</sup>。

「東部ユーラシア」の地理範囲をめぐる、研究者の間ではいまだ意見が一致しないが、おおむね「パミール以東」の地域を指す。西嶋の「東ア

ジア」が漢字文化圏に属する中国、朝鮮半島、日本とベトナムを対象とするのに対して、「東部ユーラシア」は、中国の漢人居住地域（漢地）とその周辺の突厥、吐蕃、契丹、モンゴルなど非漢字圏の遊牧勢力をも対象に含む。東部ユーラシア関連の研究において、従来の「東アジア」を「東部ユーラシア」に言い換えただけのものも散見されるが、「東アジア」の枠組みそのものを批判し、それに代わる枠組みとして「東部ユーラシア」を積極的に用いる研究も少なくない。今や「東アジア」に代わる地域概念として「東部ユーラシア」を使用することは、一つの潮流になっており、「東アジア」そのものが死語と化して消滅しかねないとする意見さえ現れている<sup>4)</sup>。

では、「東アジア」から「東部ユーラシア」への空間概念の転回は何を意味し、歴史研究に何をもたらしたか。「東部ユーラシア」概念は「東アジア」概念に取って代わるのだろうか。本稿では、近年の東アジア世界論批判を踏まえつつ、東部ユーラシア研究の方法論的特徴を検討し、これらの問題について考えたい。

## 一、近年の「東アジア世界論」批判

西嶋定生は1962年の論文「六～八世紀の東アジア」ではじめて「冊封体制論」を提起し、1973年の論文「東アジア世界の形成と展開」で「東アジア世界論」を完成させた<sup>5)</sup>。「東アジア世界論」は、「冊封体制論」と「東アジア文化圏説」の二つの柱からなる。それによれば、近代以前には、地球上に複数の「地域世界」が併存し、そのうちの一つが「東アジア世界」であり、東アジア世界は中国王朝と周辺諸勢力間の冊封一朝貢に基づく一元的な政治世界であった（「冊封体制論」）。東アジア世界は中国と朝鮮、日本とベトナムからなり、これらは漢字、儒教、仏教（漢訳仏典）と律令制という共通の文化的現象を共有した（「漢字文化圏説」もしくは「東アジア文化圏説」）。中国王朝を中心とする国際政治秩序は10世紀初頭に唐が滅んだ後に終焉を迎え、その後東アジア世界に経済交易圏が形成され、宋代における学問と芸術の高度な発展により、中国は東アジア世界の文化的中心となった。明代には中国王朝を中心とする冊封体制が回復し、勘合貿易体制とともに統一した海陸交通網が形成され、清代まで続いた。ヨーロッパ勢力が19世紀半ばに出現したことによって、東アジア世界は最終

的に崩壊した。

「東アジア世界論」は日本を含む「東アジア」地域内部の歴史的関連性を説明する理論として日本の歴史学界で広く受け入れられ、1980年代以降は「中世東アジア史」、「東アジア近世史」、「東アジア海域史」など多分野の研究が盛んに行われてきた。一方、西嶋説、とりわけ冊封体制論に対しては、早くから日本史、東洋史研究者から疑問が呈された。1962年、旗田巍は、東アジア文化圏の実体は明白ではなく、唐を中心とする東アジア世界があったかどうかとも明らかではなく、特に東アジア諸国のなかで日本は「異例な存在」であったとし、東アジア諸国の間に起こった変動に必然的・内的関連はないと主張した<sup>6)</sup>。東洋史側からは、堀敏一は1963年度の歴史学研究会大会で、「冊封」概念では中国王朝と突厥や回鶻、吐蕃など北方・西方諸民族との関係を説明することはできないと指摘した。堀は「東アジア」という地域概念を用いつつも、冊封ではなく、「羈縻」が周辺諸勢力に対する中国王朝の緩やかな支配のあり方であったと主張した<sup>7)</sup>。後に、堀は「羈縻」には魏晉南北朝時代の「冊封」から唐代の「羈縻州」支配へと強化されたと述べた<sup>8)</sup>。堀の批判に対して、西嶋は正面から反論しなかった。そもそも西嶋の関心は隋・唐王朝と「東辺」との歴史的関連性にあった。前出の1962年の論文において、西嶋は、唐と突厥、唐と回鶻はそれぞれ父子、兄弟の関係にあって、「冊封」の君臣関係ではなかったと指摘したが、中国王朝とこれら北方・西方諸民族との関係については、「当面の課題ではない」と述べている<sup>9)</sup>。

ここで留意すべきは、堀と西嶋はともに「東アジア」という地域概念を用いるものの、両者の対象とする空間領域は異なっている、という点である。西嶋定生の「東アジア」が中国と漢字文化圏に属する東辺諸国を対象とするのに対して、堀は中国王朝と北方・西方の諸民族との関係も視野に入れて、非漢字圏のチベット高原やモンゴル高原を含めている。

1970-1980年代、鬼頭清明は東アジアの国際関係を左右するのは冊封関係ではなく、それぞれの国の国内の権力関係であったと強調した<sup>10)</sup>。山尾幸久は、西嶋の冊封体制論について、「相互性・現実性を特色とする国家間の政治関係を、一方的に中国側の形式的・名目的な政治理念から、一元論的に説明する」ことに問題があると指摘する<sup>11)</sup>。鬼頭と山尾の論点は堀の「北方・西方視点」とともに、近年の「東アジア世界論」批判に受け継がれている。

そして、2000年前後から、「東アジア世界」の実在性が問われ、歴史研究における「東アジア」概念そのものの有効性が疑問視されるようになった。西嶋説に対する近年の批判には二つの特徴がある。一つは東アジア世界論の時間・空間的枠組みに対する批判であり、もう一つは周辺諸勢力、諸民族の主体性の強調である。

西嶋説の時空間的枠組みに対して、モンゴル史専門の杉山正明は次のように批判する。すなわち、従来の研究は中国正史をはじめとする漢文資料に基づいて唐や宋を巨大視した。乾燥地帯の東突厥やウイグル遊牧国家と唐は冊封関係ではなく、対等国同士であった。唐の衰退をもたらした安史の乱からモンゴル帝国解体までの六百年あまりの間、中国とユーラシアは陸と海の両方で「文明圏」の枠をこえてつながり、連動していた。「文化圏」を重視する西嶋の研究スタンスは「近現代のまなごしによる現存国家の枠組みを前提にした」ものであり、それゆえ、西嶋の東アジア世界論や冊封体制論は「事実としては無理が目につき、ほとんど成立しがたいもの」であった<sup>12)</sup>、という。後述のように、研究対象の空間範囲を中国とその周辺地域から「ユーラシア」に広げること、時間軸を中国王朝が弱体化する時期に定めること、そして、文化圏を重視するこれまでの「東アジア史」の研究スタンスを否定することは、多かれ少なかれ近年の東部ユーラシア研究に影響を与えている。

杉山と同様に、多くの論者は堀が1960年代に提起した「北方・西方視点」から、「東アジア」の「狭さ」を批判する。たとえば、山内晋次は、吐蕃は唐とほぼ対等な立場にあり、独自の国際秩序を作り上げたとし、西嶋の冊封体制論では唐と吐蕃の関係を説明できない、と述べている<sup>13)</sup>。古松崇志は、「東アジア世界論」には、近代以前の世界を複数の文化圏に分割してとらえる観点が内包されており、これをもって中国史と中央ユーラシア史との関連をとらえることは難しい<sup>14)</sup>、と指摘する。

こうした「北方・西方視点」からの批判に加えて、日本史を中国や朝鮮半島との歴史的関連のなかでとらえるという戦後以来の「東アジア史」的視点も批判の俎上に載せられた。山内晋次は、従来の「東アジア史」の枠組みでは、日本史研究は日・中・韓(朝)という範囲のみで考察を終えてしまいがちで、これは古来の「天竺・震旦・日本」という三国史観にかわる「新たな三国史観」にすぎないと述べ、「東アジア史」の枠から脱するための新しい枠組みとして「東部ユーラシア」や近年注目を集めている「海

「東部ユーラシア」は「東アジア」に取って代わるのか

域アジア」を用いて、多様な広域的歴史の「連関」やヒト・モノ・情報の「つながり」を重視するよう提言した<sup>15)</sup>。廣瀬憲雄は「東アジア世界」が歴史学の視野を狭めているとし、これを打破するために「東部ユーラシア」を提唱し<sup>16)</sup>、古松崇志は中国史とユーラシアとのつながりを重んじる視点から「ユーラシア東方」という地域概念を提唱した<sup>17)</sup>。このように、「東部ユーラシア」は「東アジア」に取って代わる新しい地域概念として日本の歴史学界に登場したのである。

そして、一部の論者は周辺の主体性を重視する観点から東アジア世界論を「中国中心論」として批判した。廣瀬憲雄は、歴史学研究会2010年度全国大会古代史分会「東アジア世界論の現状と展望」において、西嶋説は先進地域から周辺諸勢力との歴史的連関を想定するもので、「周辺諸勢力を主体的な存在として位置づけることが困難であり<sup>18)</sup>、「構造的に中国中心との譏りを免れ得ない」と批判している<sup>19)</sup>。これはかつて西嶋説を「中国側の政治理念に基づいた一方的な説明」と批判した山尾の論点とほぼ同じである。

その他、脱国民国家史観の視点から東アジア世界論や「東アジア」概念を批判する論点も提起された。李成市は、日本古代国家の形成・成立過程、漢字の受容などの諸問題が「中国」、「中国文化」との対照で論じられる東アジア世界論は、近代国民国家が对他かつ対自的に自己を構想する「非歴史的」な図式であったと批判する<sup>20)</sup>。桃木至朗は、「海域アジア史」の視点から、中国文明圏ないし漢字文化圏を前提とする「狭義の東アジア」（日本・朝鮮・中国）だけに注目する従来の研究の背景に「一国主義やナショナリズム」があったと述べた<sup>21)</sup>。羽田正はグローバル・ヒストリーの視点から、「地球を一つとする新しい世界史」を構想する際、「東アジア」という政治性の強い排他的な空間概念を用いることに対して慎重な態度を示している<sup>22)</sup>。

周知のように、1980年代以降、国民国家を単位とする近代歴史学への批判が広がり、一国史の「大きな物語」で構築されたヨーロッパ中心主義の世界史への批判が強まった。2000年前後から、グローバル・ヒストリーが日本の歴史学界で大きく注目されるなかで、ヒト・モノ・情報の移動、歴史の連関、国際秩序の多様性を重視する「新しい」研究方法と、何らかの指標を設定して「東アジア」ととらえようとする「古い」研究方法との間に対立が生じた。東アジア世界論に対する近年の批判は、国民国家を単

位とする歴史研究の一国史的「狭さ」、「排他性」を批判する方向へ展開される一方で、いわゆる国民国家の一国史批判よりも深い歴史的、社会的意味がある。戦後日本の歴史学界では、戦前・戦中の独善的な日本史研究を批判し、日本の歴史を中国や朝鮮半島との関連性のなかでとらえ直すことが喫緊の課題であった。マルクス主義歴史学が大きな影響力を有するなかで、西嶋定生を含む多くの知識人は革命中国に親近感を抱き、日米同盟に反対する安保闘争に関わり、中国との国交樹立を求めた<sup>23)</sup>。こうした時代背景の下で生まれたのが、中国と日本を含む「東辺諸国」との歴史的、文化的つながりを強調する「東アジア史」の枠組みであった。しかし、安保闘争の失敗や高度経済成長後日本社会に起きたさまざまな変化、歴史学界におけるマルクス主義歴史学の退潮<sup>24)</sup>、冷戦終結後の国際情勢の変化や中国の経済大国化、とりわけ2010年ごろより領土問題をめぐって高まった日中間の国民感情の対立は、「東アジア」という枠組みの再考につながった。そして、2000年前後にグローバル・ヒストリーへの関心が高まるなかで、「東部ユーラシア」という新しい枠組みをもって「東アジア」を乗り越えようとする研究が次々と現れたのである。

## 二、東部ユーラシア研究

### 1. 「東部ユーラシア」の定義

「東部ユーラシア」や「ユーラシア東部」、「東ユーラシア」、「ユーラシア東方」などはいずれも Eastern Eurasia に対応する言葉であり、ユーラシア大陸の東部を指す。「ユーラシア」(Eurasia) は Europe と Asia を合わせた語であり、ユーラシア大陸を指す。これはロシア革命後に海外へ亡命したロシアの知識人たちが1920年代に用いた合成語である。彼らは、ロシアを先進的なヨーロッパ部分と遅れたアジア部分に分ける従来のヨーロッパ中心主義的なロシア認識を打破し、歴史や文化、自然景観におけるロシアの一体性を強調し、ロシアのアイデンティティを高めようとした<sup>25)</sup>。

私見によれば、Eastern Eurasia に対応する日本語の地域概念として最初に現れたのは、中国都市史専門の妹尾達彦が1999年に用いた「ユーラシア大陸東部」およびその略語「ユーラシア東部」である(その対象となる地理空間は後に拡大した。詳細については後述)。それより前に、モンゴル史研究者岡田英弘や杉山正明は「中央ユーラシア」という語を積極的に

「東部ユーラシア」は「東アジア」に取って代わるのか

用いた。そもそも「中央ユーラシア」(Central Eurasia)は内陸アジア史研究者 D. Sinor が戦後早い時期に提起した地域概念である。Sinor によれば、ヘロドトス以来、ヨーロッパ人はヨーロッパとアジアを二項対立的にとらえ、アジアを他者として扱った。これに対して、Sinor は、ユーラシア大陸を一つとしてとらえて、次のように指摘する。すなわち、ユーラシア大陸では、西のヨーロッパ文明、ユダヤ文明、イランから南のインド文明、東の東南アジア文明、中国文明まで、主な文明地帯はいずれも大陸の周辺に位置する。大陸の北部、すなわち「中央ユーラシア」は、気候条件により人間が到達しがたいため、未だ独自の文明が作り出されていない。中央ユーラシアの遊牧民族はしばしば軍事力をもって文明地域を征服するが、彼らは文明を吸収して、自ら進んでこれに同化した<sup>26)</sup>。ここで Sinor は「中央ユーラシア」をユーラシア大陸の文明地帯と対照的な「野蛮地帯」ととらえている。一方、岡田や杉山はモンゴル史研究において「中央ユーラシア」という地理的概念を用いて、モンゴル史を元という中国の一王朝の歴史としてではなく、ユーラシア大陸の東西を支配した巨大なモンゴル帝国の歴史としてとらえた。岡田は「中央ユーラシア」をバイカル湖畔から西へ、モンゴル高原、ジュンガル盆地、カザフスタン草原、北コーカサスを通してウクライナに至る遊牧民の生活空間と定義し<sup>27)</sup>、杉山は、「中央ユーラシア」を「乾燥世界」を主体とする、狩猟・遊牧・牧畜・農耕を営む多様な人々からなる超広域の「生活圏」であり、複数の「文明圏」をまたがる一個の「文明世界」ととらえた<sup>28)</sup>。二人の研究が象徴するように、日本の歴史学界において、「中央ユーラシア」概念やそこから派生した「東部ユーラシア」概念は、ニュートラルな地理概念として使用されている。このことが「文明圏」を前提とする西嶋説と異なるという点は注意に値する。

さて、「東部ユーラシア」の定義について、筆者の見限りでは、以下のいくつかの用例がある。

- (1) ユーラシア大陸東部、ユーラシア東部(妹尾達彦) ①主に現在の中華人民共和国の空間、外モンゴルを除く清朝の統治空間(1998年)<sup>29)</sup>。②一般に東アジアと呼ばれている地域。中国大陸、シベリア東部、朝鮮半島、日本列島、東南アジアを含む(2018年)<sup>30)</sup>。
- (2) 東ユーラシア(上田信) 中国雲南省大理を中心とする半径3000キロの同心円。西はイラン高原東部、北はモンゴル高原、東は中国東北

- 地方、朝鮮半島、日本の九州西部、南はフィリピンや東南アジアの島嶼部、インド亜大陸の東半分を含む(2006年)<sup>31)</sup>。
- (3) 東部ユーラシア(菅沼愛語・菅沼秀夫) 東アジアから中央アジアまでの地域(2009年)<sup>32)</sup>。
- (4) 東部ユーラシア(森部豊) パミール以東のユーラシア大陸東部<sup>33)</sup>。
- (5) 東部ユーラシア(山内晋次) 日本、中国と朝鮮を含む「東アジア」とその周辺の海域世界、およびモンゴル高原、チベット高原を含む「中央アジア」とを合わせた広域の歴史世界(2011年)<sup>34)</sup>。東アジア(日・中・韓・朝)+東北アジア+北アジア+中央アジア+東南アジア(2011年)<sup>35)</sup>。
- (6) 東部ユーラシア(廣瀬憲雄) パミール高原以東、多くの場合「東アジア地域」と一致する(2011年)<sup>36)</sup>。西嶋定生の「東アジア世界」に含まれていないモンゴル高原とチベット高原を含む(2014年)<sup>37)</sup>。
- (7) ユーラシア東方(古松崇志) ユーラシア大陸のかたまりを強く意識した概念であり、おおよそはパミール以東の空間を含意し、中国本土、朝鮮半島、マンチュリア、東シベリア、モンゴリア、河西回廊、東トルキスタン、チベット、雲南、インドシナ半島(2011年)<sup>38)</sup>。
- (8) 東部ユーラシア(阿部幸信) 黄海・東シナ海、南シナ海、チベット高原、モンゴル高原に囲まれた半閉鎖的空間(2013年)<sup>39)</sup>。
- (9) 東部ユーラシア(鈴木靖民) ユーラシアを二分した東部。中国を中心にしたパミール高原、マラッカ以東。交易、宗教を介した人やモノの移動・交流・交易によってインド、ペルシャ、サラセンまでを含む(2016年)<sup>40)</sup>。

以上をみると、「東部ユーラシア」が対象とする地理空間は多義的であり、研究者の間で見解の相違がある。あえて最大公約数的にいうと、「東部ユーラシア」の地理範囲は「パミール以東」の地域を指し、その地理範囲は清朝の領域とほぼ一致する。これについては、以下の三点が注目される。

第一に、「東部ユーラシア」と「東アジア」との関係について。上に挙げた用例のなかに、「東部ユーラシア」を「東アジア」と一致する地理空間ととらえるものがいくつかある。つまり、「東アジア」を「東部ユーラシア」に言い換えているのみである。その場合、「東部ユーラシア」は、非漢字圏のモンゴル高原、チベット高原をも含めた、堀敏一の「東アジア」

「東部ユーラシア」は「東アジア」に取って代わるのか

と同じ地理空間を対象とする。第二に、東洋史研究において、北魏や遼などの北族王朝は従来中国史の一部分とされてきたが、「東部ユーラシア」という概念を用いることによって、中央ユーラシアとの関連でとらえ直すことが可能になる。第三に、日本の位置づけについては、東部ユーラシア論者の間では意見が一致しない。上に列挙した諸定義のうち、明確に日本を「東部ユーラシア」の一部とするのが(1)–(2)、(2)と(5)の三つである。日本を「東部ユーラシア」の一部と見なさないのが(1)–①、(7)と(8)の三つである。その他の用例において日本が「東部ユーラシア」に含まれるかどうかは明らかではない。これは、日本の歴史を「東アジア史」の一部とする西嶋の東アジア世界論と大きく異なる。後述のように、「東部ユーラシア」の地域設定における日本の位置づけの曖昧さにより、東部ユーラシア研究において、日本史が周辺的な位置におかれることになる。

## 2. 東部ユーラシア研究

前項でみたように、「東部ユーラシア」と名乗る研究のなかに、「東アジア」を「東部ユーラシア」に言い換えただけのものもあるが、西嶋説の時空間の枠組みを拡大し、中国王朝の国際秩序が貫徹しない外交関係や多様な歴史の「連関」、ヒト・モノ・情報の「つながり」を重視するのが東部ユーラシア研究に共通する特徴である。個々の研究を論評することは筆者の能力を超えるが、以下では、こうした方法論の特徴を踏まえて、東部ユーラシア研究の現状を概観したい。

近年発表された東部ユーラシア関連の著書・論文は、それぞれ生態・環境と世界システムに着目した上田信と妹尾達彦の研究を除けば<sup>41)</sup>、従来の東アジア古代史分野で扱われる歴史的諸事象を研究の対象としている。そのうち、日本史分野においては、従来、倭国・日本と中国王朝との関係、とりわけ日唐関係が中心であったが、東部ユーラシア研究では、日本と新羅、百済、渤海などとの関係がより重視される。なかには、日本と「東部ユーラシア」内陸部との人やものの移動、情報の伝達を考察する研究も現れている<sup>42)</sup>。東洋史分野においては、従来中国史の文脈のなかでとらえられがちな契丹、ソグドなどの北方・西方諸民族の人的移動や中国王朝との関係を、遊牧政権と中国王朝の「対等・敵対関係」や「非君臣関係」としてとらえ直すことで、「東部ユーラシア」に複数の国際秩序が併存し、周

辺諸勢力の「主体性」が強調されている<sup>43)</sup>。以下では、東アジア世界論批判の論者たちが重視する時空間的枠組みと周辺の主体性という問題を中心に、東部ユーラシア研究の特徴について見てみよう。

第一に、空間的枠組みの拡大について。西嶋の東アジア世界論が中国の「東辺」を重視するのと対照的に、東部ユーラシア研究は「パミール以東」、なかには東シナ海、日本海、東南アジアなどの海域世界をも含むより広い空間を設定し、中国と西方・北方遊牧政権との戦争や外交を通じて、西嶋の「冊封体制論」では見えてこなかった複数の国際秩序が存在したと主張し、また、「東部ユーラシア」の巨大な空間内におけるヒトやモノ、情報の移動を通じた地域間の連関を重視する。山内晋次は、10-13世紀ごろの日本・朝鮮・東南アジアにおける海上交易を比較し、それらが単なる私貿易ではなく、国家・王権と直結する活動であったと指摘した。これを踏まえて、山内は、日本が中国から律令制を継受したことから行われた従来の日中比較に対して、国家や社会の発展段階・規模の相違などから比較の有効性に疑問を提起し、中華世界の周縁という共通性をもつ日本・朝鮮・東南アジアを対象とする比較研究を提言する<sup>44)</sup>。菅沼愛語と菅沼秀夫は、7世紀後半唐と吐蕃との間の数回にわたる戦争を手がかりに、新羅による朝鮮半島の統一、渤海国の建国、突厥と契丹の勢力拡大が唐・吐蕃関係に与えた影響を論じた<sup>45)</sup>。山内は、従来「東アジア」の枠組みでとらえられる日宋間の硫黄貿易を「東部ユーラシア」の視野から検証し、11世紀に北宋王朝が日本から大量の硫黄を購入したことの直接的な原因は、当時北宋は西夏との戦争に向けて百万の弓と火炮箭を製造するため、火薬の主要な原料である硫黄を日本や朝鮮半島、中央アジア、西アジアから購入した、と指摘した<sup>46)</sup>。

第二に、時間的枠組みの拡大について。西嶋定生が隋唐帝国全盛期の東アジア国際関係を重視するのと異なって、東部ユーラシア研究は、中国王朝の勢力が弱体化する安史の乱から五代、南宋にいたる時期を重視する。森部豊は『ソグド人の東方活動と東ユーラシア世界の歴史的展開』(2010年)において、「中国史からではなく、中国北部と北アジア、北東アジアを含む空間、唐王朝の後半から五代、宋代までの時期を一つのまとまった時空間」と設定し、安史の乱以降のソグド人の政治的活動を考察した<sup>47)</sup>。廣瀬憲雄は、時間枠を4-13世紀の五胡十六国時代から隋、遼、金時代まで拡張し、中国王朝と周辺諸民族との関係をとらえ直した。それによれば、

この千年におよぶ長い時間のなかで、中国王朝の政治原理が東部ユーラシアの国際秩序の中心であった時期は、隋初から安史の乱まで（583-755）のわずか二百年足らずであり、そのうち中国王朝が圧倒的な優勢を占めるのは630年から682年までの唐の全盛期のわずか五十年に過ぎず、「冊封体制」がもっとも有効に機能していたこの期間は全体的にみればむしろ「特異な時期」であった<sup>48)</sup>、という。

第三に、周辺諸勢力の主体性の重視について。東アジア世界論の「中国中心主義」を克服しようとするのは東部ユーラシア研究のもう一つの特徴と言える。それは山内晋次の次の言葉に端的に現れている。すなわち、従来の「東アジア史」が日本史の相対化に貢献したのに対して、「東部ユーラシア」という歴史的視野は、「中国」、「中国史」そのものの相対化にもおおきな役割を果たすはず<sup>49)</sup>だということである。こうした問題意識から、東部ユーラシア研究は、中国王朝と北方・西方の遊牧勢力との「対等・敵対関係」、「非君臣関係」に着目し、国際秩序の複数性を強調している。山内は、唐の玄宗皇帝開元20（732）年前後における唐の国際秩序の認識には「吐蕃—突厥・突騎施—新羅—奚・契丹—渤海・南詔—護密・識匿・勃律・罽賓・日本」という序列があり、したがって唐の対外政策の重心は北方・西方の吐蕃、突厥、突騎施との関係にあり、「唐とほぼ対等関係にあった」吐蕃がある程度自らを中心とする国際秩序をつくったと指摘し、西嶋の冊封体制論の有効性に疑問を呈した<sup>50)</sup>。古松崇志は、1004年に契丹と北宋の間で締結された澶淵の盟約が、百年ほど続いた契丹と中原政権との不安定な関係を終結させ、「ユーラシア東方の南北二大国」間の平和共存体制を確立したとして評価し、これを複数の国家が共存する「澶淵体制」と称した<sup>51)</sup>。さらに、廣瀬憲雄は次のように指摘する。すなわち、東部ユーラシアの中心には、南の農耕王朝と北の遊牧王朝、時期によっては西の遊牧王朝を加えた複数の大帝国有り、その周辺に「小帝国」としての倭国／日本、渤海、ベトナムなどの諸勢力が位置する。これらの諸勢力間の外交は、君臣関係が貫徹しない関係や非君臣関係が中心であり、従来注目されてきた君臣関係が貫徹する事例はむしろ例外的であった。東部ユーラシアの外交関係を規定する国際秩序は、周辺諸勢力のものも含めた複数の秩序が併存し、中国王朝の国際秩序が大きな影響力を持つ時期は、東部ユーラシアの中心としての農耕王朝と遊牧王朝が一体化した、唐の全盛期という特異な時期のみであった、という<sup>52)</sup>。

要するに、東部ユーラシア研究は、「東アジア」の「狭さ」を批判し、「東部ユーラシア」という新しい地域概念を用いることによって、中国を「東アジア史」の中心とする西嶋の東アジア世界論を克服しようとしている。では、「東部ユーラシア」は新たな地域概念として「東アジア」に取って代わるのだろうか。以下では、東部ユーラシア研究の課題を検討しつつ、この問題について考えていきたい。

### 三、「東部ユーラシア」は「東アジア」に取って代わるのか

まず、東部ユーラシア研究の特徴とされる時空間枠組みの拡大と移動や連関の重視について考えてみたい。東部ユーラシア研究は、グローバル・ヒストリーに代表される歴史研究の新しい潮流の一環として、ヒト・モノ・情報の移動と歴史の連関を重視する。しかし、日本の近代歴史学の歴史を振り返ると、これは必ずしも新しい視角とはいえない。明治後期に誕生した東洋史学は、塞外民族の移動や東西交渉を主要な研究対象としていた。その一例を挙げると、桑原隲蔵は『蒲寿庚の事蹟』のなかで、蒲寿庚一族が西アジアから中国に移住したルートや広州や泉州などに残した足跡をたどった。桑原の研究は、西アジアから長安を経て広東・福建沿海地域までの広大な空間、唐初から宋を経て元にいたる長大な時間を対象に、東西交渉、海上貿易、「番」漢通婚、中国王朝の沿海貿易政策など多様なテーマを扱った。「大正史壇の大記念碑」<sup>54)</sup>と讃えられたこの研究は、時空間的枠組みの広さや論証の緻密さなどの点において、「東部ユーラシア」を舞台とする近年のソグド人研究を凌ぐものがある。

東部ユーラシア研究はさまざまな境界をまたがるヒト・モノ・情報の移動や歴史の連関の解明を目指しているが、歴史に対する人々の理解を深めるためには、移動や連関の背後にある真の動因を見逃してはならない。これについて、村井章介は、前出の日宋間の硫黄貿易に関する山内の研究に対して、物流を指標とする地域設定は、産出地と消費地によって広がりや自ずと規定される性格があり、硫黄産地と「海域アジア」が一致するように見えるのはむしろ偶然であり、これは16世紀における銀の中国への流入を指標にとる場合、中南米を地域に加える必要が生じてくるのと同様であると述べ、「東部ユーラシア」や「海域アジア」といった地域設定に疑問を呈した<sup>55)</sup>。

「東部ユーラシア」は「東アジア」に取って代わるのか

つぎに、周辺諸勢力の主体性の重視について。東部ユーラシア研究は、西嶋説を中国中心主義と批判し、北方・西方の遊牧政権と中国王朝の「対等・敵対関係」、「非君臣関係」に着目し、国際秩序の複数性を強調する。これはヨーロッパを他の地域に優越するヨーロッパ中心主義を批判するグローバル・ヒストリーに通ずる視角である。歴史研究におけるヨーロッパ中心主義について、S. コンラードは、グローバル・ヒストリーはヨーロッパ中心主義から脱却しようとする反面、深層の権力構造を無視する危険がある、と鋭く指摘し、「ヨーロッパ中心主義」(Eurocentrism)と「ヨーロッパの中心性」(Europe-centeredness)を区別しなければならないと主張している。それによれば、「ヨーロッパ中心主義」は歴史解釈の一つのパターンとして、ヨーロッパを歴史の進歩の主要な推進力と見なしている。これに対して、「ヨーロッパの中心性」は、「ヨーロッパが現在に近い時期において果たした主導的な役割」を意味する。「産業化が最初にイングランドで起こったと言うことは、決してヨーロッパ中心主義ではない。しかし、産業化がイングランドでしか起こりえないと主張すると、これはヨーロッパ中心主義になる」。「グローバルな動きに関するあらゆる新しい叙述は、西ヨーロッパや後のアメリカ合衆国が果たした主導的な役割を覆い隠すべきではない」<sup>56)</sup>、と警鐘を鳴らしている。

コンラードのいう「ヨーロッパ中心主義」と「ヨーロッパの中心性」は東アジア史の研究にも当てはまる。漢人知識人が編纂した中国正史の華夷的な歴史叙述は「中国中心主義」であるが、中国王朝と周辺諸政権との関係において中国が政治面、文化面で果たした中心的な役割を記述するのは「中国の中心性」であって、「中国中心主義」ではない。これについては、すでに西嶋定生、堀敏一、浜下武志、深谷克己など多くの研究者によって解明されている<sup>57)</sup>。1990年代以降、「周辺の視点」から中国を相対化しようとする研究が進められたが、村井章介は、かつて自身が関わった研究プロジェクトについて、前近代の日本の歴史をアジアの文脈において10の時期に区分した時、当初の意図に反して、中国王朝の盛衰・交替とほぼ重なる区分になったことが明らかになった経緯を振り返り、「日本」を超える有機的な広がりを構想するとき、「中国」のプレゼンスはかくも大きく、西嶋説に投じられた「中国中心史観」という批判は、つねに論者にはねかえってきってしまう」と述べ、「東アジア」あるいは「東部ユーラシア」、「海域アジア」とは、しょせん「漢族文明」の圧倒的なプレゼンスに関連付け

られ、巻き込まれていく地域空間に過ぎない、と指摘している<sup>58)</sup>。これまでの東部ユーラシア研究をみる限り、残念ながら、村井の指摘に正面から答える論考は存在しない。

前述のように、西嶋の「冊封体制論」に対して、中国側の政治理念からの一元的な説明であり、諸国の主体的立場が無視されている、という批判があった。これに対して、堀敏一は次のように反論している。すなわち、魏晋南北朝のような中国王朝の弱体な時代にもかかわらず、倭の五王や高句麗、百済などが朝貢した。それは「諸国の側に必要があって、諸国の主体的な選択」であった<sup>59)</sup>。北方・西方の遊牧国家と中国との関係については、遊牧国家にとって、隣接する中国の豊かな物資を獲得することが第一の目的であった。遊牧国家の略奪は中国とのたえまない戦争を生んだが、中国が強力なときには、中国王朝への朝貢と貿易を通して物資が入手された。遊牧諸民族は唐の支配秩序に入ることによって、平和を享受し、交通・貿易が保証された。このような国家を中国王朝は征服する条件を持たず、和親や冊封、羈縻などを通じて諸民族の自治を容認した<sup>60)</sup>、という。このように、堀は、西嶋が強調した中国と「東辺」諸国との政治的、文化的関係を重視しつつも、北方・西方の諸民族と中国との関係を「東アジア」という枠組みの中に入れていた。中国王朝と周辺諸勢力との関係を見る堀の視点は、「中国の中心性」に据えたものであって、「中国中心主義」ではなからう。

東部ユーラシア研究は全体として、中国王朝と周辺諸勢力との関係を力と力の対抗に基づく近代国家の「外交」関係と見なし、中国王朝と北方・西方の遊牧民族との「対等」、「敵国」、「非君臣」関係に着目し、「東辺」に対する関心が薄い。なかには、「国際秩序の多様性」を強調するため、わずか30年間しか存在しなかった突厥可汗国(552-583)を「世界帝国」と呼び<sup>61)</sup>、突厥や吐蕃など唐に敵対する政権のみに焦点を当てた研究もある。しかし、このような視点からは、中国王朝と周辺政権との冊封-朝貢関係が顕著に現れた明清期の東部ユーラシアの国際関係を説明することが困難であり、ましてや「東アジア史」に代わる「東部ユーラシア史」の全体像を描くことはできないだろう。

東部ユーラシア研究の最大の問題点は社会と文化に対する関心の欠如である。地域研究において、ある地理空間が他の地理空間と異なる一つの「地域」となる前提として、その「地域」が歴史的・文化的関連性を有する自

「東部ユーラシア」は「東アジア」に取って代わるのか

律的な存在でなければならない。この点において、「東アジア」と「東部ユーラシア」との間に大きな違いがある。「東アジア」についていえば、漢字文化圏を前提とする西嶋の「東アジア」であれ、北方・西方の諸民族をも含めた中華世界を対象とする堀の「東アジア」であれ、16世紀におけるヨーロッパ勢力の拡大による世界の一体化以前において、中国王朝と周辺諸民族は「冊封」、「羈縻」、朝貢貿易など様々な形で関わり合い、他の地域と異なる独自の国際秩序を形成していた。東アジアにおいて、ヨーロッパ、西アジア、南アジア、東南アジアなど他の地域と異なる独自の歴史が展開されたことは、戦後の研究ですでに明らかになっている。このように、漢字、儒教、仏教（漢訳仏典）と律令制を共通項とする西嶋の「東アジア文化圏説」は研究者の間で広く受け入れられ、社会一般にも広まった。

一方、東アジア文化圏を前提とする西嶋の東アジア世界論と異なって、東部ユーラシア論の主な対象は外交関係やヒト・モノ・情報の移動であり、制度や文化への関心が希薄である。これは「南北問題」を主軸とする明治期に成立した東洋史、とりわけ塞外史に共通する特徴である。戦前の東洋史は華夷観念を否定し、周辺異民族と漢民族との勢力消長の歴史、とりわけ異民族による中国支配を研究の主な対象とした。白鳥庫吉によれば、東洋史は漢民族が代表する南の勢力と「北狄」と称される北方民族の勢力が対抗する歴史であり、南北両勢力の「一興一廢、一弛一張とこれを中心として回転する付随勢力の離合集散」が「東洋史の一貫する大勢」であった<sup>62</sup>。南と北、中原と周辺、漢民族と周辺諸民族は力と力がぶつかり合い、天下争いの渦のなかで浮沈する。白鳥が描いたこのような「東洋史の大勢」は、力と力がぶつかりあう国民国家同士の関係を扱う近代外交史と視点が重なる。しかし、そのような「東洋」は、制度や文化の共通性を持たない空虚な概念であった。「東部ユーラシア」がそのような空虚な概念にならないためには、「東部ユーラシア」が対象とする地域内部の歴史的、文化的、社会的関連性を実証的に解明しなければならないだろう。

最後に指摘しておきたいのは、東部ユーラシア研究における日本の周辺化の問題である。西嶋説の最大の意義は、日本史を中国、朝鮮半島との歴史的関連のなかでとらえることを可能にした点にある。東アジア世界論を批判する人たちもこれを評価している。近年「東アジア史」という枠組みの「窮屈さ」を批判し、日本史を「東部ユーラシア」の枠組みでとらえる研究が増えているが、その際、日本はそもそも「東部ユーラシア」の一員

として想定されていないか、「東部ユーラシア」の中心地帯から遠く離れた国として位置づけられている。これでは、1980年代以降多くの日本史研究者によって開拓された東アジア中世史、東アジア近世史、東アジア海域史の研究成果はどのように生かされるのだろうか。

東部ユーラシアにおける日本の位置づけについて、李成市は、6-8世紀における日本を含む東辺国家の歴史的な展開は中央アジアの突厥や吐蕃との関係と深く連動しており、唐の軍事活動は広く東部ユーラシアの諸民族を巻き込むものであったと指摘しながらも、日本古代国家の成立は隋唐時代の国際秩序と深い関わりがあり、そのような秩序世界を「東アジア世界」と見なすことはいまだに有効であると述べている<sup>63)</sup>。熊谷公男は、「東部ユーラシア」という新しい枠組みが「とくに中国を中心とした歴史理論である「冊封体制論」への批判としてはかなり有効であることは間違いない」とする一方で、北方・西方の遊牧政権が日本史の理解にどの程度重要かに疑問を呈し、日本などの東辺国家の国際関係を考察する際は「東アジア世界」は依然として有効な枠組みである<sup>64)</sup>、と指摘している。李や熊谷の指摘は、西嶋の東アジア世界論が日本史側からみて依然として有効な枠組みであることを裏付けている。

東部ユーラシア研究における日本の周辺化は、日本の他者化をも意味する。「東アジア」から「東部ユーラシア」への空間概念の転換によって、日本と中国大陸、朝鮮半島との歴史的関連性に対する研究者の関心が低下することとなれば、日本史研究自体がアジア史研究と切り離され、再び漂流することが懸念されるだろう。

## おわりに

西嶋定生の東アジア世界論に対する近年の批判は主に次の三点である。①冊封体制論を骨格とする東アジア世界論は中国王朝の政治理念に基づいたものであり、周辺の主体性を無視している。②東アジア世界論では、中国と北方・西方諸民族との関係を説明できない。③東アジア世界論では、ともすれば日本史を中国・朝鮮・日本の三カ国からなる狭い地域に閉じ込めてしまいがちである。これらの「問題」を克服するため、近年、「東部ユーラシア」という新たな地域概念が提起され、数多くの研究が発表されている。

「東部ユーラシア」は「東アジア」に取って代わるのか

「東部ユーラシア」はおおむね「パミール高原以東」を指すが、その地理範囲は西嶋定生の「東アジア」より広く、西嶋説を批判・補足した堀敏一の「東アジア」とほぼ重なる。西嶋定生の「東アジア」は、漢字文化圏に属する中国の漢人居住地域（「漢地」）、朝鮮半島、日本とベトナムからなる「狭義の東アジア」である。中国王朝と周辺諸政権の君長との政治的な冊封関係、中国文化の漢字、儒教、仏教（漢訳仏典）、律令制の四つの指標を共有するという条件を満たしたのは、中国とその東辺諸国に限られている。これに対して、堀敏一の「東アジア」は、西嶋の「東アジア」に北方・西方の非漢字圏を加えた地理空間を対象とする。その地理範囲は一般に理解される中国、朝鮮半島と日本からなる「東アジア」とほぼ一致する。興味深いことに、堀が1960年代初期に提起した「北方・西方視点」は近年の東アジア世界論批判の根拠の一つになっているが、堀は晩年まで東アジア世界論を唱え続けており、その議論の根底には中国を中心とする「中華世界」の秩序原理があった。これに対して、現在流行の東部ユーラシア研究は、西嶋の東アジア世界論を中国中心論と批判し、これを克服するため、時空間的枠組みを拡大させ、広範囲にわたるヒト・モノ・情報の移動や歴史の連関を重視し、周辺諸政権の主体性を強調する。

東部ユーラシア研究は近年歴史学研究で脚光を浴びているグローバル・ヒストリーの特徴を有する。しかし、明治後期に誕生した東洋史学の文脈からすると、それは必ずしも新しい研究手法とは言えない。東部ユーラシア研究では、戦前の東洋史、とりわけ塞外史研究の中核をなす南北問題が再び注目され、一部の研究者は、中国王朝が弱体化する時期を視野に研究の時空間的枠組みを設定し、中国王朝と西方・北方遊牧政権との「対等・敵対関係」、「非君臣関係」に焦点を当て、倭国／日本を含む複数の小帝国群からなる東部ユーラシアの多元的な国際秩序を構成した。他方、東部ユーラシア研究は社会や文化、制度への関心が低く、異なる国や地域間の文化的、社会的関連性の解明に力点を置く東アジア史研究の「文化圏」という視点を批判・排除する傾向がある。そのため、歴史の「連関」の背後にある真の動因は往々にして見逃されがちである。言ってみれば、東部ユーラシア史は戦前の東洋史と同じ難問に直面している。すなわち、東部ユーラシアというきわめて広域な空間の各部分の間にどのような文化的、社会的関連性、共通性があるかについて、実証研究がされていない。

西嶋の「東アジア」と堀の「東アジア」は地理範囲が異なるが、16世

紀ヨーロッパ勢力の拡大による世界の一体化以前の中国、朝鮮、日本からなる地域の独自の国際秩序に注目し、前近代「東アジア」の自律的な歴史像を描いた点において、両者は共通している。そのため、前近代におけるこの地域の歴史的事象を説明する地域概念として、「東アジア」は日本の歴史学界で強い支持を得てきた。「東部ユーラシア」が「東アジア」に代わる地域概念になるかどうか、結局のところ、それは今後の実証研究によって東部ユーラシアに共通する文化的、社会的要素を明らかにし、他の地域と異なる東部ユーラシア独自の歴史像を描くことができるかどうかにかかるといえるだろう。

## 注

- 1) 2009年高等学校学習指導要領解説・地理歴史編(平成21年12月)では、世界史Aに関しては、「東アジアでは、漢字文化、儒教、中国を中心とする国際体制などに触れ、日本を含む東アジアの特質をとらえさせ」、「日本列島の歴史を東アジアの歴史の中に明確に位置付けるようにする」と書かれている。日本史Bに関しては、「指導に当たっては、(中略)東アジア世界の動向や東アジア世界からもたらされた文物・諸制度が、我が国の国家や文化の形成に大きな影響を及ぼしたことに留意し、地理的条件とかかわらせながら多面的・多角的に考察させて、この時代の特色を大きくとらえさせる」と示されている([http://www.mext.go.jp/component/a\\_menu/education/micro\\_detail/\\_icsFiles/afieldfile/2014/10/01/1282000\\_3.pdf](http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afieldfile/2014/10/01/1282000_3.pdf))。
- 2) 2010年に二つの全国規模の学術会議の場で西嶋の「東アジア世界論」に対するもっとも激しい批判がなされた。山内晋次は歴史科学協議会第44回全国大会(大会テーマ「世界史認識と東アジア」)において、「東アジア史」再考——日本古代史研究の立場から(『歴史評論』第733号、2011年5月号)と題して報告し、廣瀬憲雄は、歴史学研究会2010年度全国大会古代史分会「東アジア世界論の現状と展望」において、「倭国・日本史と東部ユーラシア——6-13世紀における政治的連関再考(『歴史学研究』第872号、2010年10月)と題して報告し、西嶋説を批判した。
- 3) 専修大学社会知性開発研究センターでは、「古代東アジア世界史と留学生」研究プロジェクトの終了をもって、附置された東アジア世界史研究センターが活動を終え、「古代東ユーラシア世界の人流と倭国・日本」(2014~2018年度)研究プロジェクトの開始とともに、「古代東ユーラシア研究センター」が設立された。飯尾秀幸「研究プロジェクトを開始するにあたって」、『専修

「東部ユーラシア」は「東アジア」に取って代わるのか

- 大学古代東ユーラシア研究センター年報』第1号、2015年3月、1頁。
- 4) 岡本隆司「『東アジア』と『ユーラシア』——「近世」「近代」の研究史をめぐって」、『歴史評論』第799号、2016年11月、37-38頁。
  - 5) 西嶋定生「六～八世紀の東アジア」(1962年)は後に『中国古代国家と東アジア世界』(1983年)に収録される際に「東アジア世界と冊封体制——六～八世紀の東アジア」と改題され、『西嶋定生東アジア史論集』第三巻に収録された時にもこの題名が使用されている。「東アジア世界の形成と展開」(原題「東アジア世界」)は講談社『総合講座 日本の社会文化史』1(1973年)に掲載されたものである。両論文はいずれも『西嶋定生東アジア史論集 3 東アジア世界と冊封体制』(岩波書店、2002年)に収録されている。
  - 6) 旗田巍「十～十二世紀の東アジアと日本」、『岩波講座 日本歴史4 古代(4)』、岩波書店、1962年、337-370頁。旗田の「日本異質論」からの批判は、その後比較史研究の進展によって覆されたといえる。たとえば、宮嶋博史は東アジアにおける小農社会や朱子学受容に関する比較を通して(宮嶋博史「東アジア世界における日本の「近世化」——日本史研究批判、趙景達ほか編『比較史的にみた近世日本——「東アジア化」をめぐって』、東京堂出版、2011年)、深谷克己は「漢字と地域文字を混用併用した意思伝達」、「仏教・儒教・道教の不変的土俗の超越観念」、「老荘を借りた心法尊重」など11の指標に基づく「東アジア法文明圏」の提起を通して(深谷克己『東アジア法文明圏の中の日本史』、岩波書店、2012年、46-50頁)、それぞれ前近代東アジアにおける社会や文化の共通性を論じた。
  - 7) 堀は特に唐王朝が国内の州県制度にならって新たに征服した周辺地域で実施した「羈縻州」制度に注目した。それによれば、羈縻州の長官は慣例上現地民族の長がつとめ、都護府の管轄下に置かれた。唐代の羈縻州の数は一時850を超えた(堀敏一「東アジアの歴史像をどう構成するか——前近代の場合」(1963年)、堀敏一『律令制と東アジア世界——私の中国史学(二)』、汲古書院、1994年、120-121頁)。東アジア世界論に関する堀の見解については、堀敏一『中国と古代東アジア世界——中華的世界と諸民族』(岩波書店、1993年)、堀敏一『東アジア世界の形成——中国と周辺国家』(汲古書院、2006年)も参照されたい。
  - 8) 堀敏一、前掲『中国と古代東アジア世界——中華的世界と諸民族』、186-187頁。
  - 9) 西嶋定生、前掲「東アジア世界と冊封体制——六-八世紀の東アジア」、『西嶋定生東アジア史論集』第三巻、55頁。
  - 10) 鬼頭清明は、唐の太宗による高句麗遠征(644年)を取り上げ、太宗の出兵は西嶋定生が指摘した高句麗が冊封関係を破壊したことに起因するのではなく、唐が北方において突厥などに勝利し、高句麗問題を解決する余裕がで

- きたからである、と指摘する。鬼頭清明『日本古代国家の形成と東アジア』、校倉書房、1976年、113-114頁。
- 11) 山尾幸久「戦後歴史学の古代東アジア史認識」、西川長夫・中原章雄編『戦後価値の再検討』、有斐閣、1986年、160頁。
  - 12) 杉山正明『疾走する草原の征服者——遼、西夏、金、元』、礪波護等編『中国の歴史』第8巻、講談社、2005年、27頁、366頁。
  - 13) 山内晋次「日本古代史研究からみた東アジア世界論——西嶋定生氏の東アジア世界論を中心に」、『新しい歴史学のために』230・231合併号、1997年、14頁。
  - 14) 古松崇志「10-13世紀多国併存時代のユーラシア（Eurasia）東方における国際関係」、『中国史学』第21号、2011年、121頁。
  - 15) 山内晋次、前掲「「東アジア史」再考——日本古代史研究の立場から」、『歴史評論』第733号、40頁、2011年5月号、53-54頁。
  - 16) 廣瀬憲雄、前掲「倭国・日本史と東部ユーラシア——6-13世紀における政治的連関再考」、『歴史学研究』第872号、48頁。
  - 17) 古松崇志、前掲「10-13世紀多国併存時代のユーラシア（Eurasia）東方における国際関係」、『中国史学』第21号、121頁。
  - 18) 廣瀬憲雄、前掲「倭国・日本史と東部ユーラシア——6-13世紀における政治的連関再考」、『歴史学研究』第872号、30頁。
  - 19) 廣瀬憲雄『古代日本外交史——東部ユーラシアの視点から読み直す』、講談社、2014年、24頁。
  - 20) 李成市『東アジア文化圏の形成』、山川出版社、2000年、84頁。
  - 21) 桃木至朗編『海域アジア史研究入門』、岩波書店、2008年、10頁。
  - 22) 羽田正「新しい世界史と地域史」、羽田正編『グローバルヒストリーと東アジア史』、東京大学出版会、2016年、26-27頁。
  - 23) 当時、一橋大学西洋史の教授上原専禄は、西嶋定生ら数名の若い研究者を集めて世界史教科書『日本国民の世界史』を編纂し、1960年に出版した。この教科書には、日米安保条約に反対し、アジア諸国と協力し、とりわけ「日中関係の問題を解決すること（中国との国交樹立——引用者）」が日本が直面する現実的課題である、と書かれている。上原専禄編『日本国民の世界史』、岩波書店、1960年、17頁。
  - 24) 西嶋説の思想的背景について、廣瀬憲雄と山内晋次は東アジア世界論とマルクス主義歴史学との関連性に触れ、西嶋説の「時代的制約」を指摘した（廣瀬憲雄『東アジアの国際秩序と日本』、吉川弘文館、2011年、3頁。山内晋次、前掲「「東アジア史」再考——日本古代史研究の立場から」、『歴史評論』第733号、40頁）。
  - 25) 浜由樹子「“ユーラシア”概念の再考——“ヨーロッパ”と“アジア”の間」、

「東部ユーラシア」は「東アジア」に取って代わるのか

- 『ロシア・東欧研究』第37号、2008年、19-20頁。
- 26) Denis Sinor, “Inner Asia, A Syllabus”, *Uralic and Altaic Series*, Vol. 96, Indiana University: Bloomington, and Mouton, the Hague, 1969, pp. 1-4.
- 27) 岡田英弘『世界史の誕生』、筑摩書房、1992年。
- 28) 杉山正明「中央ユーラシアの歴史構図——世界史をつないだもの」、『岩波講座 世界歴史』第11巻、『中央ユーラシアの統合』、岩波書店、1997年、4-11頁。
- 29) 妹尾達彦「中華の分裂と再生」、同編『岩波講座世界歴史9 中華の分裂と再生（3-13世紀）』、岩波書店、1999年、8頁、12頁。
- 30) 妹尾達彦『グローバル・ヒストリー』、中央大学出版部、2018年、46頁。
- 31) 上田信『東ユーラシアの生態環境史』、山川出版社、2006年、71-75頁。
- 32) 菅沼愛語・菅沼秀夫「七世紀後半の“唐・吐蕃戦争”と東部ユーラシア諸国の自立への動き——新羅の朝鮮半島統一・突厥の復興・契丹の反乱・渤海の建国との関連性」、『史窓』第66号、2009年2月、3頁。
- 33) 森部豊『ソグド人の東方活動と東ユーラシア世界の歴史的展開』、関西大学出版部、2010年、1頁。
- 34) 山内晋次、前掲「東アジア史再考——日本古代史研究の立場から」、『歴史評論』第733号、45頁。
- 35) 山内晋次「九世紀東部ユーラシア世界の変貌——日本遣唐使関係史料を中心に」、古代学協会編『仁明朝史の研究——承和転換期とその周辺』、思文閣出版、2011年、4頁。
- 36) 廣瀬憲雄、前掲『東アジアの国際秩序と古代日本』、1頁、17頁注(4)。
- 37) 廣瀬憲雄、前掲『古代日本外交史——東部ユーラシアの視点から読み直す』、33頁。
- 38) 古松崇志、前掲「10-13世紀多国併存時代のユーラシア (Eurasia) 東方における国際関係」、『中国史学』第21号、121頁。
- 39) 阿部幸信「東部ユーラシアの環境と多様性」、吉澤誠一郎編『歴史からみる中国』、放送大学教育振興会、2013年、27頁。
- 40) 鈴木靖民『古代日本の東アジア交流史』、勉誠出版、2016年、406頁。なお、ほとんどの論者は「東部ユーラシア」を「東アジア」の代替概念として使用するが、鈴木靖民は「東アジア」を「東部ユーラシア」の一部分とし、「東部ユーラシア世界は東アジア世界を不要とするものではなく、東アジア史像の捉え直しや再構成にもつながるであろう」と述べている(同書、409頁)。
- 41) 上田信は、中国雲南省大理を基点とする茶葉、銅、翡翠の交易路で結ばれた地域として東シナ海、東南アジアの交易圏に着目している(上田信、前掲『東ユーラシアの生態環境史』)。妹尾達彦によれば、前近代のアフロ・ユーラシア大陸には、西部、中央部、東部のそれぞれが一つの世界システム(広

- 域空間組織)をなす相互補完的な交易システムが存在した。遊牧地域と農耕地域の古典国家が南北に相対峙して分立する構造となっており、遊牧地域の草原地帯を主な東西軸として互いに密接に関連しあう。16世紀以降はこれら複数の世界システムの時代が終わり、欧米を中心とする単独の世界システムの構築が始まった(妹尾達彦、前掲『グローバル・ヒストリー』)。
- 42) たとえば、廣瀬憲雄「倭国・日本史と東部ユーラシア——6-13世紀における政治的連関再考」(『歴史学研究』第872号、2010年10月)。山内晋次、前掲「九世紀東部ユーラシア世界の変貌——日本遣唐使関係資料を中心に」。皆川雅樹「日本古代の外交交易と“東部ユーラシア”」(『歴史学研究』第885号、2011年10月)。鈴木靖民「東部ユーラシア世界と東アジア世界——日本古代と世界構造」、『文学・語学』(全国大学国語国文学会)第214号、2015年。
- 43) 「東部ユーラシア」という名を冠した学術誌の特集として、『アジア遊学』第160号(2013年1月)に『契丹(遼)と10-12世紀の東部ユーラシア』、『唐代史研究』第20号(2018年8月)に「東部ユーラシアの政治空間——都市と儀礼」と題した特集がそれぞれ組まれた。前者に収録された契丹文字、官制、外交などをテーマとする26の論文は、いずれも塞外史研究の流れを汲んだものである(勉誠出版、2013年)。後者は唐代史研究会2016年度夏季シンポジウムの特集であり、隋唐時代の長安の都市空間や都市と王権儀礼にみる倭国の政治空間などをテーマとする五つの論文を収録している。「東部ユーラシア」という新しい地域概念の意義を積極的に主張する論文が見当たらないのが両特集の共通点である。これに対して、2014年度に発足した専修大学社会知性開発センター付設の古代東ユーラシア研究センターが刊行した年報『古代東ユーラシア世界の人流と倭国・日本』(2015年-2019年)では、いずれも「古代東ユーラシア」関連の特集を組んでおり、積極的「古代東ユーラシア」という地域概念を採用している。個別研究としては、前掲森部豊『ソグド人の東方活動と東ユーラシア世界の歴史的展開』(2010年)、鈴木靖民「東アジア世界史と東部ユーラシア世界史——梁の国際関係・国際秩序・国際意識を中心に」、『専修大学社会知性開発センター東アジア世界史研究センター年報』第6号、2012年。菅沼愛語『7世紀後半から8世紀の東部ユーラシアの国際情勢とその推移——唐・吐蕃・突厥の外交関係を中心に』(淡水社、2013年)、鈴木靖民・金子修一編『梁職工図と東部ユーラシア世界』(勉誠出版、2014年)、福島恵『東部ユーラシアのソグド人—ソグド人漢文墓志の研究』(汲古書院、2017年)が挙げられる。
- 44) 山内晋次「日本古代史研究からみた東アジア世界論——西嶋定生氏の東アジア世界論を中心に」、『新しい歴史学のために』230・231合併号、1997年、19頁。
- 45) 菅沼愛語・菅沼秀夫「七世紀後半の“唐・吐蕃戦争”と東部ユーラシア諸

「東部ユーラシア」は「東アジア」に取って代わるのか

- 国の自立への動き——新羅の朝鮮半島統一・突厥の復興・契丹の反乱・渤海の建国との関連性』、『史窓』第66号、2009年2月。
- 46) 山内晋次、前掲「“東アジア史”再考——日本古代史研究の立場から」、『歴史評論』第733号、52頁。日宋硫黄貿易の詳細については、山内晋次『奈良平安期の日本とアジア』（吉川弘文館、2003年）第二部第四章「平安期日本の対外交流と中国海商」を参照。
- 47) 森部豊、前掲『ソグド人の東方活動と東ユーラシア世界の歴史的展開』、9頁。
- 48) 廣瀬憲雄、前掲『古代日本外交史——東部ユーラシアの視点から読み直す』、35-36頁。
- 49) 山内晋次、前掲「東アジア史再考——日本古代史研究の立場から」、『歴史評論』第733号、45頁。
- 50) 山内晋次、前掲「日本古代史研究からみた東アジア世界論——西嶋定生氏の東アジア世界論を中心に」、『新しい歴史学のために』230・231合併号、14頁。
- 51) 古松崇志、前掲「10-13世紀多国併存時代のユーラシア（Eurasia）東方における国際関係」、『中国史学』第21号、121頁、123頁。
- 52) 廣瀬憲雄、前掲『古代日本外交史——東部ユーラシアの視点から読み直す』、38頁。なお、鈴木靖民は、東部ユーラシアの国際関係を「中心（大国）——周辺（大国、旁国）——辺縁（旁小国）」の三層構造としてとらえ、西のイラン系遊牧国家滑国（エフタル）、南のインド、中国、東の百済、倭国などの「大国」はそれぞれ中心となって周辺の「旁小国」を従えて、「東部ユーラシア世界」の国際秩序を描いた（鈴木靖夫、前掲『古代日本の東アジア交流史』第6章、379-382頁、407-408頁）。
- 53) 水島司『グローバル・ヒストリー入門』、山川出版社、2010年初版、2017年第8刷、1-4頁。
- 54) 桑原隲蔵『蒲寿庚の事蹟』、羽田享「本書の発刊について」、岩波書店、1935年。
- 55) 村井章介「大会第二日『東アジア史研究の現段階——境界・交流』の三報告を聞いて」、『歴史評論』第733号、2011年5月、95頁。
- 56) Sebastian Conrad, *What is Global History?* Princeton University Press, 2016, pp. 164-167.
- 57) 西嶋定生『中国古代帝国の形成と構造——二十等爵制の研究』（東京大学出版会、1961年）、堀敏一『中国と古代東アジア世界——中華的世界と諸民族』（岩波書店、1993年）。浜下武志『近代中国の国際的契機——朝貢システムと近代アジア』（東京大学出版会、1990年）、深谷克己『東アジア法文明圏のなかの日本史』（岩波書店、2012年）。

- 58) 村井章介、前掲「大会第二日『東アジア史研究の現段階——境界・交流』の三報告を聞いて」、『歴史評論』第733号、98-99頁。
- 59) 堀敏一、前掲『律令制と東アジア世界——私の中国史学（二）』、163頁。
- 60) 堀敏一、前掲『中国と古代東アジア世界——中華的世界と諸民族』、255-256頁。
- 61) 廣瀬憲雄、前掲『古代日本外交史——東部ユーラシアの視点から読み直す』、128頁。
- 62) 白鳥庫吉「東洋史に於ける南北の対立」（1926年）、『白鳥庫吉全集』第8巻、69-83頁。
- 63) 李成市「六-八世紀の東アジアと東アジア世界論」、『岩波講座 日本歴史』第2巻、岩波書店、2014年、244頁。
- 64) 熊谷公男「倭王武の上表文と五世紀の東アジア情勢」、『東北学院大学論集 歴史と文化』第53号、2015年3月、3頁。